

復古八卦方位辨

下

290891



復古八卦方位辨下卷

皇國ニ生れうる直交正一き心めて見れば大衍の數
 五十中傳へ來ぬるは姫昌ノ方位ニてをむれ逆心よ
 了たくとミまうけて人をかどしふる偽筮數とぞおぼ
 ゆる。うれ美里ノ囚れてある。七年代間ニ考へるれば
 人を欺くよハよけれど陰陽大小の數乃出る所
 は同トくて多むむづり。其のニ辨れバやる。末ふは
 り神ぞ考へちまたる人をいままきりぬを末ふは
 一と見よ。む。伏羲氏乃大衍乃數と傳へさせ
 るは必び五十有五那るべし。此數は既（既に）いへる如く
 皇神此みよへの一二三四五六七八九十ある事は

半玉の蓋ハ用ハの十中を大極トと不用

又半玉の内玉ハ無名極ト中極ハ同ク也

玉物トハ玉ハシキニ残リ四ノ策ハシキ信ハ其レ二ハニ

分ケ方ハ信ハ極ト一ハ玉ハ下ニ大極ハ側ニ至ル

玉ハ考レて九中ハ極ト一ハ玉ハ右ニ玉ハ物ト

玉ハ加ヘテ卦ナキ也

いふもさしあり。かゝるも天一地二天三地四天五
地六天七地八天九地十と傳へて。則河圖乃惣數二部
むあれバ。易此起る所。易成る所あり。されば易の著
數二用む。此五十有五乃數一。うけてもよろべ
一や。繫辭上傳ふ。天數五。地數五。五位相得。而各有合。や
いへる如く。奇偶此數。一三五七九。二四六八十。うく。うぶ。ぎ。こ。や
より。なるもの。を。天地乃惣數此中より。五を闕け。バ。五
位。一三五七九。とあり。て。奇偶成る。れ。バ。片羽。羽。羽。ア。鳥
此文よ。さへ。目を。や。免。や。せ。たる。伏羲氏。此。うく。片羽

なる。と。著數。とい。う。で。用。め。給。り。む。さ。る。片。羽。なる。著數
と。用。め。れ。い。鬼神の。天。う。け。ア。て。あ。ざ。こ。ら。い。こ。そ。す。れ。
い。う。で。の。感。び。べ。き。春秋。僖。公。四。年。に。左。氏。傳。ふ。晋。獻。公。
欲。以。驪。姫。為。夫。人。ト。之。不。吉。筮。之。吉。公。曰。從。筮。ト。人。曰。筮。
短。龜。長。不。如。從。長。云々。弗。聽。立。之。生。奚。齊。其。娣。生。卓。子。及。
將。立。奚。齊。既。與。中。大。夫。成。謀。ト。見。也。たり。龜。や。著。と。取。ア
然。る。づ。む。は。ト。ハ。ま。さ。り。筮。は。お。と。り。ぬ。べ。れ。ど。伏
羲。氏。に。傳。へ。さ。せ。たる。占。法。の。ま。さ。り。を。か。く。は。あ。り
ざ。ら。ま。と。鬼神。に。ま。し。い。ぬ。べ。き。片。羽。の。筮。法。の。て

此吉邪ア々れ安遂ニ太子申生を殺ハ不吉トぞれり
フ々此ハ志ウ々づき事ニ移む又日本後紀大同元
年三月丁亥の條ニ上以為所定山陵地近加茂神疑是
神靈致災火乎即決ト筮果有其祟上曰初ト山陵筮從
龜不從也今災異頻來可不慎故即自禱祈火災立滅ト
あア是ハ筮占けたウヘアさあるづき事ニ移むか
あるもウウト事ハ正一きハ古ヘ傳ヘのまゝに
とり擬ふ故移るズ一我國ハ鹿野移りト龜筮占此
正一ウウぬハあるぬ占法ニありウウ故移るズ一さ

るトト筮ハ長短ヤのみ心得テ偽筮法もて占せる故
もヤヤ思いつきたる人ハいさゞ獨もあるぬハ歎ッ
一き事ニ移む心ウウむハよくおり一諸大衍ハ盈
衍と見べき事いふもさる移るハ字書ニ衍ハ水溢也
也と見其數五十有五ハ移む河圖ハ玉物移る五と十
合をれを五十それ五
あやる移りされ移るマウマ大衍の數といふづき事
ア猶いウウとおゆハ人ハ字ニ有余たるト衍字と
いふも移り行ハ義とさやるづき移りウウついで
いもハ繫辭上傳れる大衍之數五十其用四十九ハ王
弼ガ註と見るに演テ天地之數所賴者五十也といハ
天地の數と演る移五十五れるづきト何故ニ所賴五
十移るヌウきウウぬウウハ移りマウ其用四十有
九則其一不用也不用而用以之通非數而以之成斯易

之大極也といへば此は其用四十有九則其一不用也
斯易之大極也といひてよきこゆべきと不用而用
以之通非數而以之成とあやしくいへば何故數乃極
乎とて又四十有九數之極也といへば何故數乃極
四十有九耶と問ふに偽筮法とすべし凡大衍極天地之數
十有五也といへば五行大義と凡大衍極天地之數五
十有五也といへば五行大義と凡大衍極天地之數五
辰二十八宿合應五十一其一不用者天之生氣將欲以
求實故用四十九馬やあらず此は強て偽筮法とす
といひてありさるる二十八宿といへば三十六禽
辰二十八宿と合せしめれば明らにさるるのば
本をたれてあれはいふにたゞ明らにさるるのば
るなりこれ京房が説は強言なりと明らにさるるのば
彌よりはさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに
とさるるにさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに
世と終へたるはと一さ事なれは伏義聖人乃せさ

せたる占法もさるるにさるるにさるるにさるるに
ふるに説卦傳ふ昔者聖人之作易也幽贊於神明而生
著參天兩地而倚數とあり此は數とさるるにさるるに
參參天兩地四字と心と中と免河圖と心とやして
見ると九が用數に極ふれば此と參天とせむは三
九二十七耶と兩地とせむは二九十八と參天兩
地に數と合すれば四十五とすれば八節に一節に於
てそれば是と著に用數とぞ思ふ參天兩地而の註と
見ると參奇也兩耦
也七九陽數六八陰數とあり此は參天兩地の註なり
とせばさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに
按ふに文義と解

一兼つても強て註せる故なり。此一參天兩地は、伏義神聖に正しき占法とある。蓋き妙文耶れを、これ偽筮法と欺れ居たる人なり。かくきや、て見れば、辨へ兼ねむ事は、いべり。かくきや、て見れば、生、蕃といへる。それ蕃數に五十五ある事、いふもさうなり。既といへる如く、易有大極といへるは、やがて十ありたり。用數四十五と大極の十を合れば、又繫辭上傳、一陰一陽之謂道といへるは、さるべき理也。これば、禮記の昏義、天子之與后、猶日之與月、陰之者即皇后也。本朝並置二宮、太無其謂と見。用數四十五、此うち、二十と二十と合せて四十とりて見るよ。

あまの五あり、此は玉也。此にありづきのや、おぼゆる。このよ、やがて、さるるこふ。大衍乃數五十五策をとり、ち、十策をぞへとりて、大極と安置して用る。此は地數あり、がうへ、具也。それ施用する四十五策まで、五策か、つとりて、其を中指と無名指と此間と挾み、玉物や、いつさおた。此五策ハ、切れる。説文、物易、筮、再、切らざるべし。按ふ、こ、此、切、字、ハ、同、字、也。古、意、ハ、也。此、字、又、殘、餘、ハ、中、央、ニ、居、テ、四、方、ニ、行、を、繩、ハ、根、元、の、義、理、外、ニ、勤、也。ハ、さ、る、事、也。又、參、天、兩、地、の、數、四、十五、一、陰、一、陽、ニ、數、四、十、と、う、ぞ、つ、や、れ、バ、餘、五、あり、は、れ、餘、數、の、余、也。と、ある、も、さ、る、事、也。や、お、ぼ、ゆる。

れバ抄効同字あり多むとはいふなり。集韻又抄を芳
と作れるより見ゆれば抄効を抄と作らざるを
ければ古意は効字とありて抄字は周易此並意と
はけてるより効字とありて又効字は什一也とあるを
トあり一余るとか多よりて見む時は四十より必
四あり一とさしおほく我の志のかまへては見ん十
て一はととおほく見えてたゞ數之余也とあり
義とおもふなり。ついでいふ小指は間一策と
さむは既よりいへる如く八卦は方位をおきう
殷をほろがむ呪詛せむのちあるに強て考へ
まうけさる姫昌が偽筮法ぬ論ずんぞる此筮
法におくうといたりてハちるすは河圖一のや
て見ゆれば抄効を指の間に挟むも河やうた外
も何らトのやと思ひやる。されど小指は間一
むよるは中指と無名指との間に二ころ。さう
指中指は參天無名指小指は兩地それさうい
うらまし。しは思ひ得るなり。漢名伏羲氏は國
大名持命が御心といふや。則それよりさうして

久慈りて問ふ奉りたり。我よるなり。諸四十策
思へるを擲りせむたれば。諸四十策
と手と信きて二つに分け。兩儀又象して。右手
成地又表して。此大極のかたはらふ掛禮部韻畧置而不用曰
掛やあり。これよりさうてさう用あり。
指小挟む義とせむ説はやらざるあり。天又表して左
手又握ぬ。一半と。右手もて四時又象りて。四
見ると。或は一。或は二。或は三。或は四。零奇なり。是
中指と無名指との間と。玉物と挟みおきする。抄策此
五數と合きて。閏月又象る。一時三月なり。うら
は。いとく。閏と。いふ。三爻なりと思ひと。一卦
は黄帝此時より立始るもの故と。うら。うら。人

此一とつみたる事
如くもなきなりて
子とて得れりや
心ふ諸又十六大極
人十歳に及りしむ
身體のついでに
身孕むり先は
事れども十より
思ふがががが
うも三三三三
神めくは我國
今よりいふ事
いふもかゝる事
三三三三三三
そらあむ人三三
とていふ事

多祿のやるる此糧米と思ふなりや。こけてふ數と多れ
ひぢりや。や見えたり。此は思ふらくは。満足と書い
二數れ三を兼たりとき。あゆさて思ひ出づるを書い
見るとわかぢり。れまは。占小用のむる。三數こそ上
これと云はまは。されば三變三爻一卦といよ。伊邪
よ。一と思ふまは。猶考ふ。二。六。此古へ傳へよ。伊邪
那美命。此心。極れ。雷神。小千五百の黄泉軍とそへて。
追。一。め。給。る。時。伊邪那岐。命。より。い。ち。り。ち。り。坂。本。外。
桃の實と三。とりて。待。撃。た。ま。ひ。一。り。を。六。や。く。と。逃。
帰。り。ぬ。と。傳。へ。て。ら。マ。此。は。三。數。れ。か。一。こ。き。故。よ。り。く
や。ア。ち。ち。た。ち。へ。る。ぬ。る。一。は。れ。や。三。軍。れ。三。乃。お。こ
れ。の。所。れ。ら。む。一。は。れ。呂。尚。と。い。へ。る。人。の。軍。の。道。り
た。と。一。は。れ。と。い。ふ。れ。ア。多。そ。れ。が。兵。書。や。い。ひ。傳。へ。る
る。六。韜。と。一。と。り。關。き。た。る。に。三。軍。と。の。ミ。論。ひ。て。六
師。を。ば。さ。ら。せ。ア。け。ア。心。用。力。あ。る。事。れ。ら。べ。か。く。て。按
心。深。う。ら。む。人。は。是。ら。を。も。思。ひ。合。け。べ。か。く。て。按
ひ。見。る。よ。探。へ。る。策。や。奇。と。劫。とは。や。が。て。參。天。とい

ふべく大極や。おきある。一半とは。や。が。て。兩。地。といふ
る。く。ぞ。思。ふ。か。く。そ。れ。は。い。や。り。さ。へ。あ。さ。ら。の。た。あ。や
し。く。も。考。へ。得。れ。た。ら。は。是。又。大。國。主。神。漢。名。扶。桑。太
帝。れ。と。れ。を。愛。惠。た。ま。ひ。て。こ。け。ら。う。せ。さ。せ。た。る。正。著
法。を。授。け。給。へ。る。外。ら。べ。一。を。思。へ。候。思。ふ。ま。ん。く。お
ま。ど。こ。ろ。も。外。く。ら。ア。が。た。き。事。と。外。む。され。ど。れ。ら
ら。正。著。法。や。い。も。ど。れ。は。免。れ。と。や。人。れ。ふ。く。ま。む。此
は。う。れ。お。ほ。を。そ。人。れ。唯。我。獨。尊。と。い。へ。る。類。よ。は。何。ら
び。う。い。ふ。此。著。法。を。げ。よ。く。正。し。や。按。ひ。知。ら。む。は。和

名鈔云。筭說文云。筭俗云殘長六寸。以計曆數ハ蘊貫反やあつ。字書

又。筭計也。數也。やあつ。寶器ハハナやりハナちりて。目ハナ二穴ハナ鼻ハナ二穴ハナ

耳ハナ二穴ハナ口ハナ一穴ハナ尿穴ハナ尿穴ハナとかづへて一一一一一一

一一と九桁ハナ又おき。是を九りて割りて見よ。一二三四

五六七八九とあり。けいで云。此一二三四

れ。九八七六五四三二一あり。是を右に又加へて見

よ。一一一一一一一一とあり。これ用數ハ一二三四

五六七八九。二。うさる。故ぞ。うさる。日月此にちかけ

をさへ計りてある筭ハ。いとも。くさる。妙あり。そのた

るを。その數乃人身此穴。よあつて。それよりおろれ

れ。又くた。く。誰もいとも。おろ。これ一二三四五六七

八九を。十二万三千四百五十六石七斗八升九合。と呼

ひて先。筭此。晉古。免。又作る。おと。上。下。下

ひ。いた。る。まで。知。ざる。人。は。あ。る。る。る。よく。考へ。見

て。これ。を。一。と。九。を。合。は。れ。ば。四。十五。那。る。事。い。ふ

も。さ。る。り。され。河。圖。の。と。除。きた。る。數。は。れ

む。あ。れ。う。る。ゆ。え。我。は。十。と。大。極。と。考へ。決。め。安。置

せ。さ。る。こ。此。一。二。三。四。五。六。七。八。九。此。用。數。の。中。央

此。が。扱。り。の。河。圖。此。玉。物。又。中。央。此。よ。り。前。の。一。二。三

四。は。奇。り。又。中。央。此。よ。り。後。の。六。七。八。九

は。少。陰。少。陽。老。陰。老。陽。の。河。圖。此。成。數。の。此。次。第。二

少。陰。と。傳。へ。來。つ。る。は。大。誤。也。か。く。し。も。あ。れ。は。目。中。心

○復古卦方位辨下卷

○十

直き明き人形は正著法なりと思ふべき事は
 此又河洛此二圖を算よりつとりて見よそれ作
 ざらぬをかけれ同ド物なり事あきらむるなり
 ど云む河圖をうつし見むは先算れ中央五を
 五におきさて五に五を加ふ心用ひて中央五の次
 を中央の五に五を加ふ心用ひて中央の五の次
 六をおき又中央の五に五を加ふ心用ひて中央の
 二枚中央の五に五を加ふ心用ひて中央の五の次
 おき次に五に五を加ふ心用ひて中央の五の次
 九が限られまは十は極や除きおとすは算れ中央
 や熱くはるるは洛書をうつし見むは算れ中央
 五をうつし十は心得是れ四折さき一を
 おき十をうつし除き九を中央の五に五を加ふ心
 又おき又三折さき二をおき十をうつし除き八
 を中央の五に五を加ふ心用ひて中央の五の次

見れづ一二三四五六七八九を同一物なり
 おれづ一二三四五六七八九を同一物なり
 二をうつし縦横とあり其角の数を思はれ
 此四十五を用ひて其中の五を扱とて四十を
 二にけ右手の半をおき左手の半を四に扱と
 奇と扱と相まはるるなり此著法よるが強ひは
 一策もあらざるを考へ見てそれ正き事をいよ
 みる算れは偽算法の事はそれ正き事をいよ
 考へ見るより少なり見よそれ正き事をいよ
 一見ることよりれはいでふいと市にちやるる出
 居る賣ト者此正著法をみごりにやまらるるは
 いやまかいらるるべしは算れ畧して一月に日數に當
 る河圖に外轉れる三十一玉物に五を加へて著數三

竹下北條
下北條
竹下北條
竹下北條

中野のせん子余

十五と一十策と大極と一廿五策と用數と。此中に
 て五策とりて中指や無名指との間小挟ミ。儲法此如
 くと一奇と扱ふ歸らるるを一爻たりある。又按ふと一
 當る。四十五策と著數を用ひて。此中にて十策と大極
 にと心得りて。河圖の四九三三六と著數と。此
 中より一策を除きおき。三十五と用數とせむ。あ
 りは河圖の。其の人此心は。方と。の。べき
 ？三爻一卦三變あり。い。や。重爻一
 卦六變あり。と。さ。の。た。事。の。多。あ。
 さて著數と畧し。た。此。三爻一卦。皆。う。
 變爻あり。又一爻變も二爻變もあり。重爻一卦

しては四爻變も五爻變も六爻變もある。されば
 とも。され。さ。の。に。既。い。る。如。ま
 か此平澤氏の八除ひして。其奇策よりして何卦とお
 き。是を上卦と。再此を下卦と。其變爻とや。る。
 六除ひして。奇策此數を。上爻まで此六位に當て。
 一爻此變とや。一家此法此類ひはあ。る。り。
 か乃姫昌と。河圖と。す。て。の。觀。易
 此眼高うぬ故ふ。はる心用あり。強て荷ひ出せる。
 畧筮法。の。と。奇策一なれば乾。二れ。ば兌とを

れる其より所は、其位則乾一、兌二、離三、震四、巽五、
坎六、艮七、坤八也。やいへる朱熹が無替に語ふ。そのうら
外に何らざるべし。猶とて、たひ一爻に變をやるれ
れば、二爻以上に變とて、事は絶て邪きなり。これ
たゞ一とてある故に、これ十有八變に煩
き筮法と看破する見識也。と、一とてあれいふと、
おぼす神れとせけやあまむ世の易學者、或は予
おきて蜂起し、是と答ふるに詞を以て、直と著
を立て、其應驗を示ひ、やいへる守村は八卦正方位と

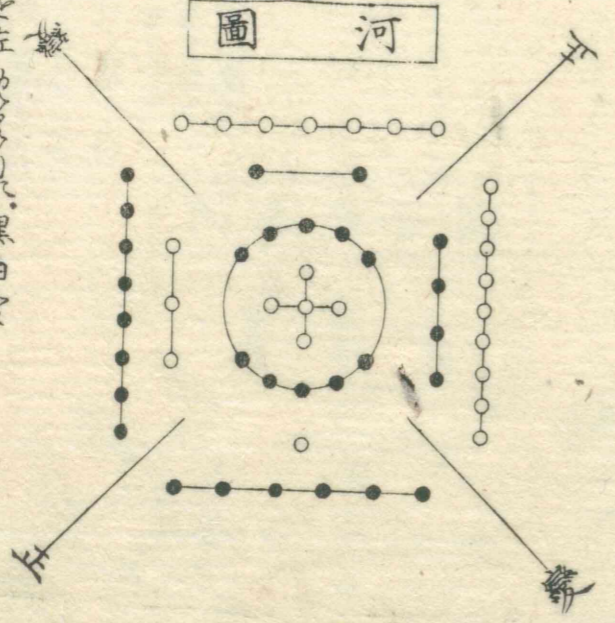
考ふるついで、正著法も按ひ得たるが故に、いふに
占判と心をつくり、かを用ゐて試されば、著を立て、と
はいひ、ぐまれど、此畧著法も、太昊神聖に神慮、
必にうめふべし、此應驗正し、事疑ひあらじ
のし、心あむ、賣卜者は、我ふも、むひて、も、か、見
て、諸おろりれる、ま、か、つ、れ、る、れ、ま、バ、文
章、此、う、め、事、ハ、ま、や、り、に、て、い、は、い、ま、ふ、
た、ぐ、だ、く、一、き、れ、こ、ま、て、ま、ま、ぐ、め、う、え、れ、バ、
は、ぎ、く、と、圖、を、出、し、め、り、上、よ、い、つ、る、事、も、に、合、を、見

てよとさとしてよ。易は漢國のその外づらいで皇
 大御國此正一き道此心むへまて萬を真心よ直くい
 つらわれえ。教へて免むとの心用る外は洛河洛二圖
 此つぎくくを我思ひふれをせむ。ちのせるぬを
 此の此國此古き傳へ此を強ひて輕免さるははら
 び方位をとり免る。皆よのそは先直き正一にふ
 眼馴さえて後よを給てあ。幾を見せむははげよく
 祈けておぐくくと。思ひつややすのそはら。とお
 へははらり。

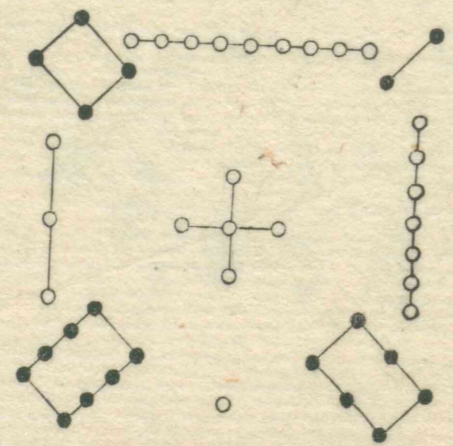
上卷十七丁左よりを見合はせし。
 角に此繩はこつさうのり。同卷に
 廿六丁のり。細書合せ見ゆべし。

上卷三十丁合せ考ふべし。

河圖



洛書

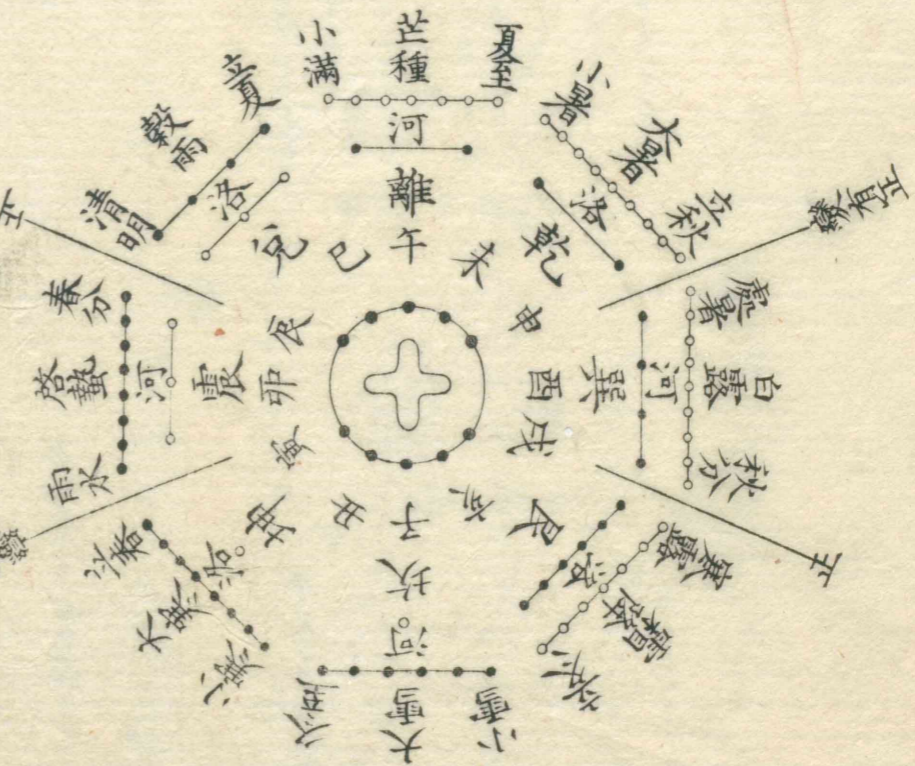


正の繩は外轉れを左めんは。黑白を
 かぞへて。又白黒や數へても十五れは
 めり。變れ繩は左めんを。白白を
 うぞふれは十六。又黒黒を。かぞふれば十
 四れ。故よまのり。

上卷三十二丁合せ見ゆなり。
正の繩は外轉のと左をうりに
黑白白中、かまへて。又白
黒黒黒とみだりて。廿九れと
ハハハ、變有正の繩左をうりに
白白黒黒とみだりてハ三十、
又變より黒黒白白と數うれハ
廿八れとみだりて。廿七れと
くりと事ハ同卷四十四丁の
細書といれり。そと見て
考へてよ。

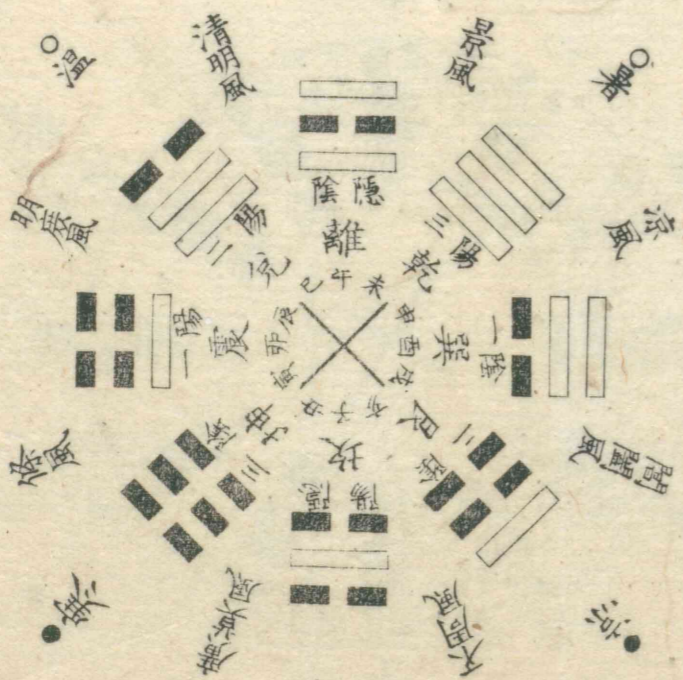
河洛之合圖

人ハ此圖を見れば、神那の心ハ、
神那の心ハ、神那の心ハ、神那の心ハ、
神那の心ハ、神那の心ハ、神那の心ハ、
神那の心ハ、神那の心ハ、神那の心ハ、



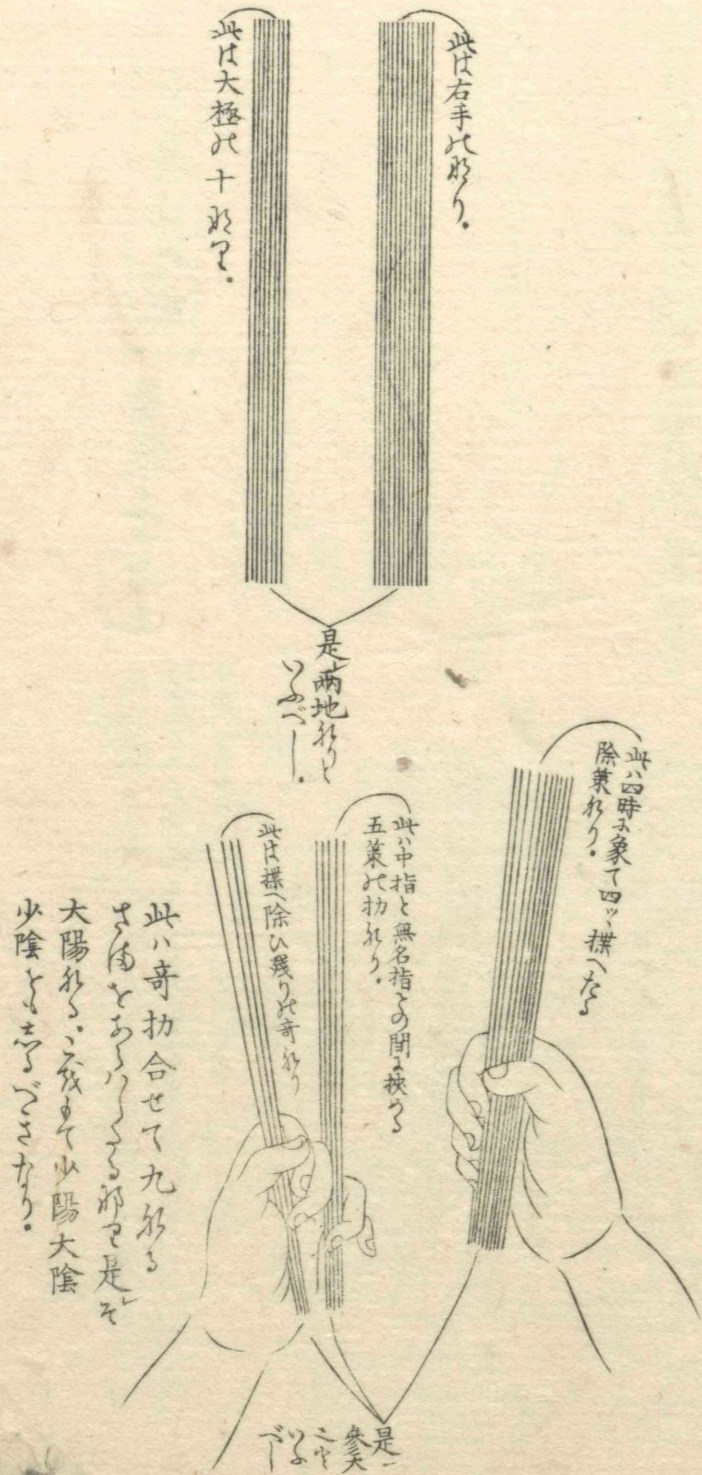
上卷四十二丁よりを合せ見て考へてよ。
諸温暑此頭乃白く、涼寒此頭のは
黒くさしハ、四時此の爲とよく心得をま
けよ。此の心、されば又よもみて
黑白とせり。天地の道よかれへる
方位やソレやよく見つけよ。
又一陽二陽云々一陰二陰云々
と云々次第此のたれざるを
考へよ。さきより、はじめてよもむ
河洛合圖此黑白と合を見て、
温涼のさやみよむ人ハ、さしむら。
此は二陽二陰此のたれざるを
り。其心よ見てよ。

復古八卦正方位



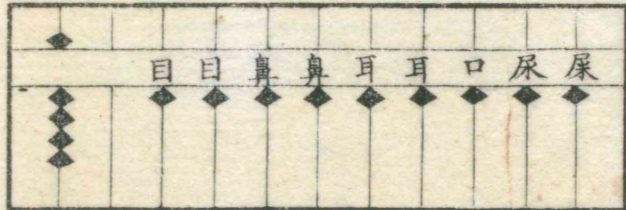
復古正著法之圖

大衍之數五十有五



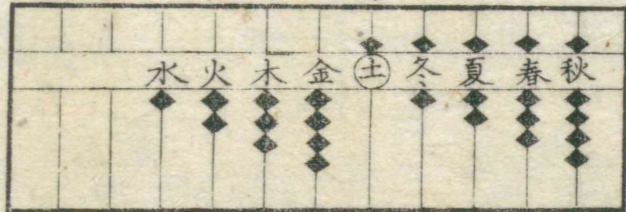
自九竅算數之起圖

つゞてよつゝ算此析は二十七なりと云ふを畧せりその心してよ



此は右と割て見づ

河圖の中央を扱



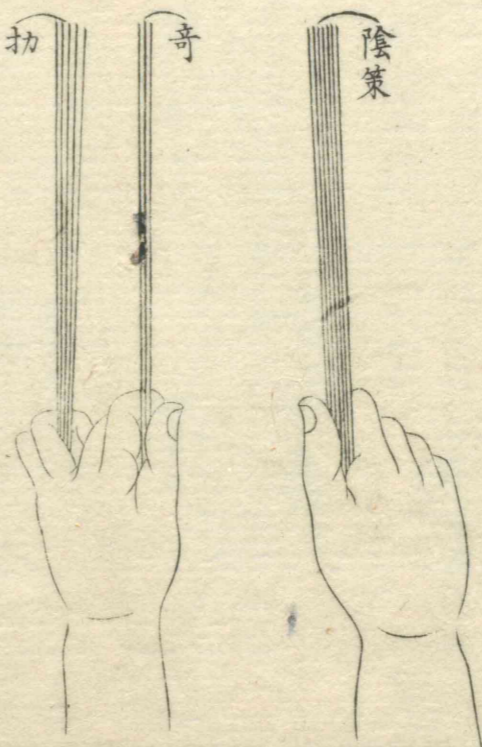
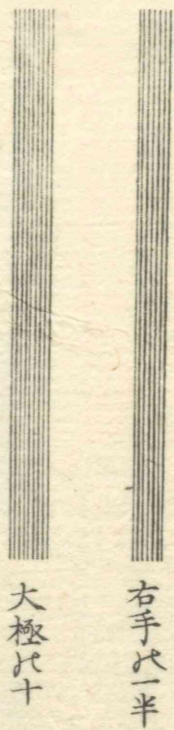
成數老陽
成數老陰
成數少陽
成數少陰
生數奇
生數奇
生數奇
生數奇
生數奇

右は河圖の用數四十五なりがればはかた十數は○は大極と稱して除きかゝる事ありなり

畧著法之圖

著數三十有五

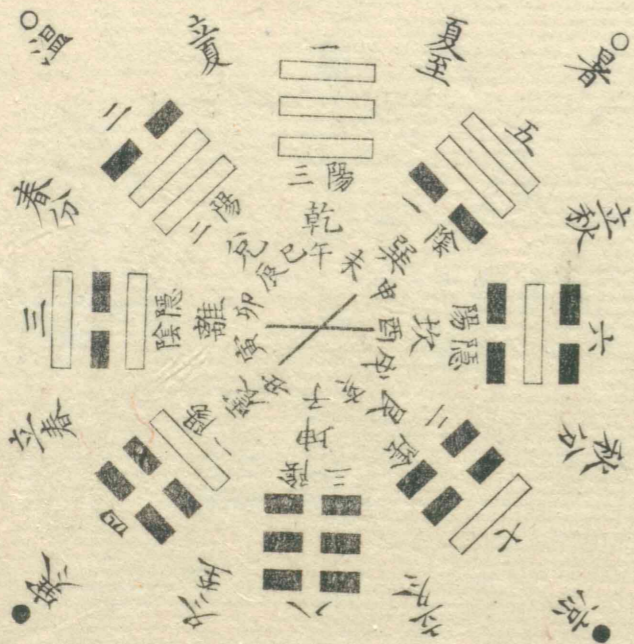
此は數と畧をさすの事なり。但し大極をも畧せむは、著數三十有六なり。一策を安置せむとつ。法此如くすべしなり。



此は奇劫合せて八なり。大陰はありさし見川なり。

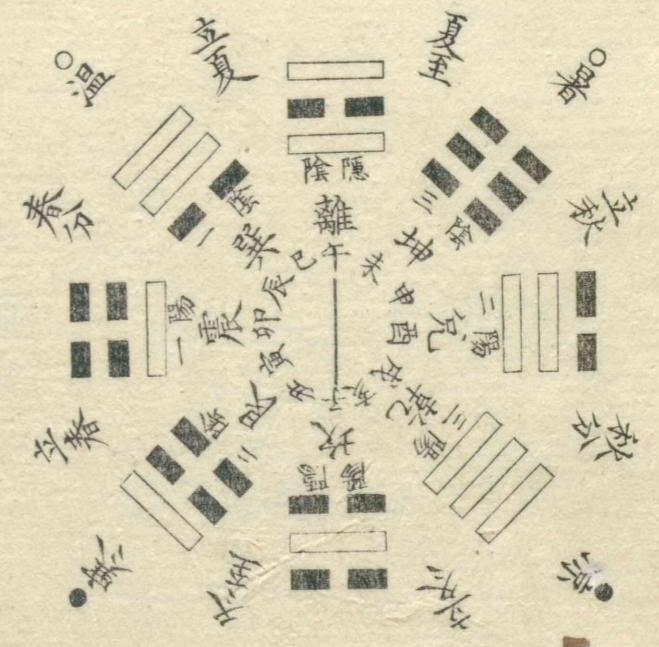
説卦傳の、雷以動之、風以散之、雨以潤之、日以暄之、云、此正まき古傳へも見れば、二繩、~~一~~のくみだるく故ふ。一陽云、二陰云、此次第もいひぬれり。されば偽方位なる事ありしなり。さて上れると、正方位よりよく合せて見て、それ正偽とまきまきてよ。

先天偽方位圖



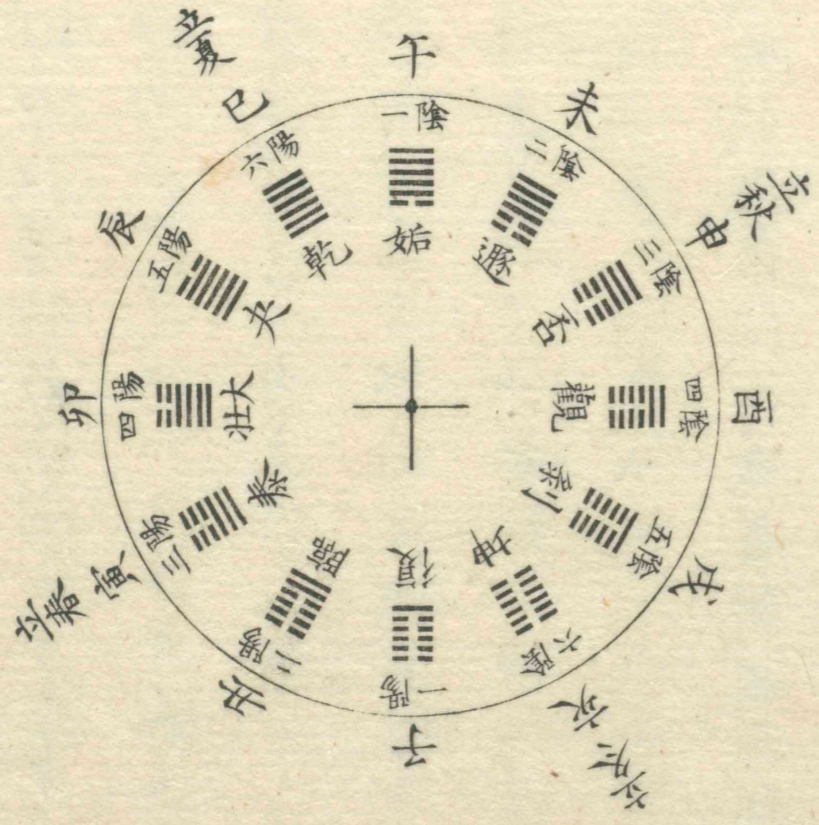
説卦傳の正しき傳へしに由りて
見れば一繩は外はさしつゝひひ
れき偽方位れるを、ちりつゝに父が
長女ふあひひひひ、母が少男
あひひひひ、長男が少女ふあひ
ひひひ、此はあまの事
おれは、陰陽は次第にたれ
て、天地の道こそひけり、上
りりりりり、我圖を合せて、
よきまやうてよ、諸よくま
たひひひを、いん、ちりつゝ
祈、けたる人れり、姫昌に
欺れぬ事、うれあぬと、い
れちりたひ、いぬ、いぬ、いぬ
おもふ、よきまやうてよ、
試みにいひ、禮記曲禮に、取妻、
不取同姓、やち、不字は可ま、かこ
古へは、取妻可取同姓、といふ傳へり、
古へは、親にぬりて、且や可字と不
かへた、ぬりて、さて天地の道は木
や、柿や梨やありては、核ぬり、
ぬり、これ上品の、長男は長女
ふあひひひひ、中品は、中男は中女
ふあひひひひ、少男は少女ふあひひ
ひひひ、故買妾、不知其姓、則卜
之、とあり、と考ふべきなり。

圖位方偽天後



頭はあつと、四時、早く目と
つけてよ、さしつゝひひ子と復
午と姑とさしは、天地の
そむく事、やちりぬ
べー、猶鴛才の人、
十二支の數は、陽始と
陰始と、見合せてよ、
さしつゝ改めたる如、
寅と復、申と姑と、お
つゝさしつゝ心づべー！

一歳二十卦之偽方位



上に出せる圖どもをよく見れど、おろの守村が考へ定むる。方位ねづらも、著法ねづらも、まらやみ神にかれよさづけたるねづら、一やいのねら人も、我にきたがけむ事ハ、まやまのまら古き傳へねづらも、うた方位どもは、皆とらにも、まらね偽方位ねらら、やおまらまらや、ねづら一かい、いでや繫辭上傳に、大衍之數五十、其用四十九、分而為二、以象兩、掛一、以象三、揲之、以四、以象四時、歸奇於扚、以象閏、五歲再閏、故再扚而後掛、やあらと論む、此は五十策と取持て、此中より

一策とりて、大極や稱して用おぼ、四十九策を用數をいひて、是と心あてに二、よまけ、天地ふ象、右手此一半をおきつ、こねら一策とりて、左手此小指の間よはさこ、天地人三才又象、小指此間ふはさこたる一策を、扚やいつ、左手此一半と、右手まて四時又象、四策づ揲へて、奇を扚、歸して閏に象、又とりおきたる、右手此一半と、左手ふやらまら、右手まて、四四を揲へて、奇を扚、歸して、うらゆまら再閏やいつるねら、られ一變ねら、かこ三變して一爻た、ついでよらむ、左手乃一半よら三策奇れば、右

手此一半より一策あり。左手此一半より一策あり。右
 手此一半より三策あり。左手此一半より二策あり。右
 手此一半より五策あり。又左手此一半より四策あり。右
 手此一半より一策あり。此は初より九策あり。是は第一
 變此なり。此は一變ハ初より九策あり。是は第一變此
 外は如くして五策あり。此は一變ハ初より九策あり。是
 法此如くして左手此一半より一策あり。右手此一半
 此一半より二策あり。左手此一半より一策あり。右手
 右手此一半より一策あり。此は初より九策あり。是は第
 又左手此一半より三策あり。右手此一半より四策あり。
 策あり。左手此一半より四策あり。右手此一半より三
 右三策あり。此は初より九策あり。是は第二變此
 此乃二變ハ初より八策あり。是は第二變此。但九策取
 たり。残り四十策を二にけし法。の如くするも。初より
 又奇策四八あり。第三變は此二變此奇策に初より
 事。此は一爻乃奇初あり。十三策あり。十七策あり。廿

一策あり。廿五策あり。是は初より周此姫昌が殷此天下を
 奪む此呪詛をむとあり。みだり又八卦此方位
 とかへたり。此は人此あり。やぶにあり。と。羨里と
 囚げれ居るるに。心を用めて河圖此真中なり。玉物
 として。五十此数は。則^{⊕⊕⊕}⊕[⊕]⊕[⊕]かくあれバ。此は數として。
 老陽老陰少陽少陰此九八七六此出ざる事ハあり。ト
 一考一得たり。偽筮法なり。此筮法此なり。ト
 あやふれ。其頃此人たちうちおどろき。元より鈍き
 性。此ハ魂ともあり。此陽盛れ。未申。陰三爻あり。

坤卦涼進むる戌亥、陽三爻の乾卦陽進む辰巳
陰一爻進むる巽卦涼起る酉、陽二爻進むる兌卦
陰盛れる丑寅、陰二爻進むる艮卦とおきかへられ
てもあつぬ方位と心づつぬ筈。天數五、地數五、五位あ
ひあふべし。奇偶此數のわかさはなされるとも志しむ。
たゞ姫昌と尊く此に思ひて、聖人といひておしけむ。
志のおもふは繫辭下傳、易之興也、其當殷之末世周
之盛德、邪當文王與紂之事、邪とあるを、又周易は
逆意と含めたる姫昌が作れる事は、易之興也、其於中古

乎。作易者其有憂患乎とあるを思ひまゝる。かく姫
昌が逆意ありて此方位の既ふいへる如く論れ
し。又筮法は方位をかへまほしく考へられ、天地此
數は五十有五なりと、五減して大衍の數五十とせら
るゝに、大極と取らるゝ一策と、四と四と撰へたる奇
此を同數めあり、猶いをむよ。右手此一半此中より、一
策とりて小指此間に入さむと、天地人三才の象る故
に志つるといふ、左に象る、是も同數なり。此は右手此
すれば、それより人に象る一策をやうしり、かひは右
手によりするが、見よき故、按ふに左手此一半此中

より一策小指此間よりはさみても、奇物合はる所といふ事なり。又左手此一半より二策ありれば、右手此より二策あり、左手此一半より四策ありれば、右手此より四策ある事もあるは、同數ありたり。いで正一奇著法にさる事あり。此は一及三變の奇物此數合せて、十三、十七、廿一、廿五、二七、三十一、三十三、三十七、四十一、四十五、四十九、五十三、五十七、六十一、六十五、六十九、七十三、七十七、八十一、八十五、八十九、九十三、九十七、一百、此は易と此故より、心氏此正著法あり、切や奇と、同數あり、事は、いさ、り、だ、り、も、い、さ、り、ぬ、れ、り、大極といはるまで。

皆別數あり、さるは強ひて、け、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、此數も、著法をたて、易と此故より、心氏此人は、偽筮法や正著法を考へ合せてよく思ふべきなり。諸上といは、如く、姫昌が奸智と七年たつて、考へ得たる筮法あり、其頃こそおとつた、世とあるま、十三、策と老陽、十七、策と老陰、此は、少陰、廿一、と少陽、廿五、と少陰、此は、老陰、此數、卦とた、事、九、八、七、六、此、

をてて遂に繫辭上傳了。乾之策二百一十有六。坤之策
百四十有六。といふ。さういふはたに説も出来なけり。此
註ふ陽爻六一爻三十六策。六爻二百一十六策。陰爻六
一爻二十四策。六爻百四十四策。とあるを見ればきか
ゆる。そのさう。撰へ除ひて。策數をゆて。いもむは志
ひどくあり。まゝして坤之策百四十有六は。二十四策と
老陰とをさるあり。此は姫昌より。いさむり。うおくれ
る。世の人此説とおぼゆれば。いよく取らむ。た
ざるあり。うと乾坤此策數といへる。論れければ。兄
三百有六十。當期之日。とあるも強言あり。其

は專ら奇勅此數をおきて。撰過の數をゆて。いさむ
り。さういふはたに説も出来なけり。此註ふ陽爻六一爻
三十六策。六爻二百一十六策。陰爻六一爻二十四策。六
爻百四十四策。とあるを見ればきかゆる。そのさう。撰
へ除ひて。策數をゆて。いもむは志ひどくあり。まゝして
坤之策百四十有六は。二十四策と老陰とをさるあり。此
は姫昌より。いさむり。うおくれる。世の人此説とおぼ
ゆれば。いよく取らむ。たざるあり。うと乾坤此策數と
いへる。論れければ。兄三百有六十。當期之日。とあるも
強言あり。其

ろのれはは終り是と云うはむよる五十策まで一策大
 極と稱してこれ終用數四十九なりこれまで四の四
 こや三變撰へ除へるが二十四策あれ終奇劫合せた
 るが二十五策ありなり諸算とやりもちて此廿五
 れ中りて劫とせら一策とやりて二十四と左におき
 右に除へる二十四とおき四時此四まで此二を割る
 終り割れば左も右も六とれるなり此少陰まで成
 終るいさほいれまば四こと撰へ除ふ法りて左に
 る六まで四除いれれば河圖なる陰は六と陰は二と

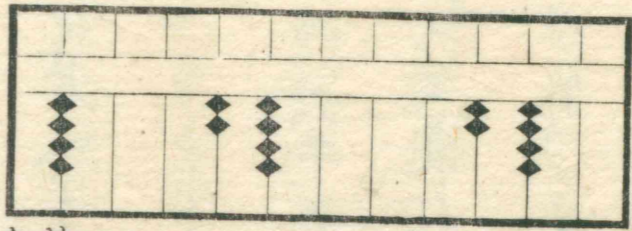
あいむうふが如し又三變撰へ除へるが二十八策あ
 れ終奇劫合せて廿一策ありなり此廿一策まで劫
 比一策とのぞ多算此左に二十とおき右に廿八とお
 き四まで割れば左は五右は七とれるなり此少陽
 終るうくに成終るいさほいれまば左は五と右
 四除いれれば河圖なる陽は七と陽の一とあいむ
 ふの如しかく少陰と少陽とはかゝるに四除いある
 終り又三變撰へ除へるが三十二策あれ終奇劫合せ
 て十七策あり此此うらまで劫比一策とれどきて

筭此左より十六やおき、右より三十二やおき、四めて割れ
後、左ハ四右ハ八や折りて、河圖の陰ハ四や陰ハ八
や、何いむうふが如し、此は老陰のうらに成終ふる
い幾ほひよて四除ひたり、又三變撰へ除つるが三十
六策あれば、奇割合をたると十三策の折り、六はう
ちよて扱此一策とのぞちて、筭此左より十二とおき、右
より三十六やおき、四めて割れば、左ハ三右ハ九とあり
て、河圖の陽ハ三と陽ハ九とあひむうふが如し、此
は老陽のうらに成終ふるい幾ほひよて四除ひれ

一かく老陰や老陽とは互^{カミ}に成終てあるなり、此れは
偽筭法を考へまうけたる、姫昌すう、志の八と老陰六
と少陰とを事此いそくしちるければ、易書と
りふ、初六六二六三六四六五六六とある六は、皆八と
何いむむと、後人此さうらにかきうへるなり、や
我ハソのなり、これさだ免此正しきまふも、よく心
得さをまほしければ、左より圖をぬむ。

三變
標へ除いたる廿四
策比數とが算
了おく。

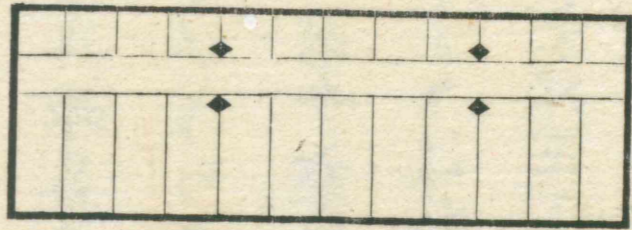
奇劫合せたる
二十五策より
扱一策と除き
たる數。



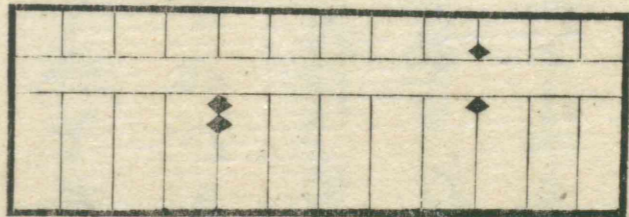
上のと割たる

上れと割たる

此法は四は是れ
右の法割て見よ。



上の法は四除いたる
是は少陰の形は
形は少陽を形は
次は少陽と見
合せてよ。

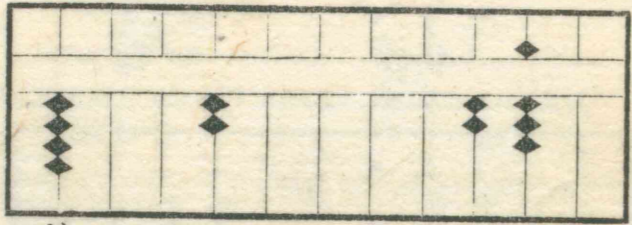


河圖は黒き成
數

同圖は黒き生
數

三變
標へ除いたる
二十八策比數。

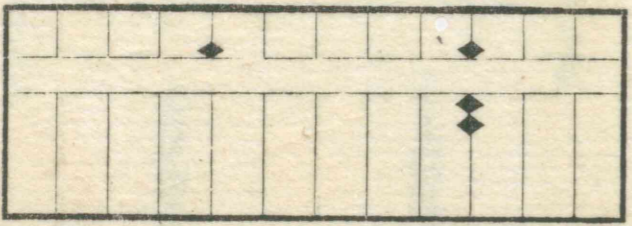
奇劫合せたる
二十一策より
扱一策と除き
たる數。



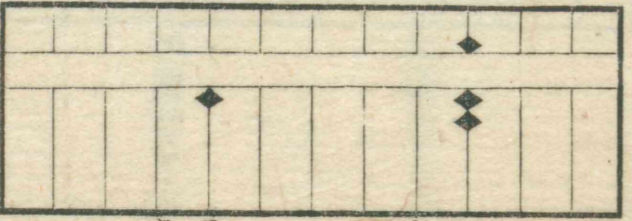
上のと割たる

上れと割たる

此れも右れと



上のと四除いたる
是は少陽の形は
かくれむ右形は
少陰の形は例は
老陰老陽の成
終つてあるが四
除いたる河圖
はあつたり自然は老と少と
呼ぶ差別見ゆ。

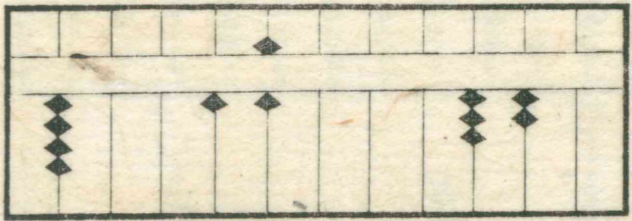


河圖は白き成
數

同圖は白き生
數

三變
 標へ除いたる三十
 二策に數

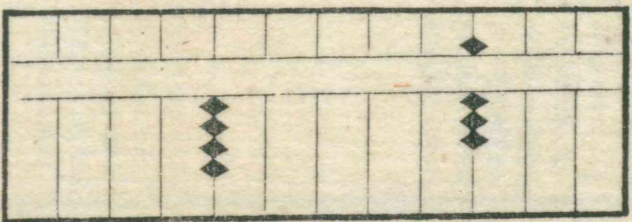
奇拗合せたる
 十七策より、拗此一
 策と除きたる數



此より右に候

上と割る

上と割る



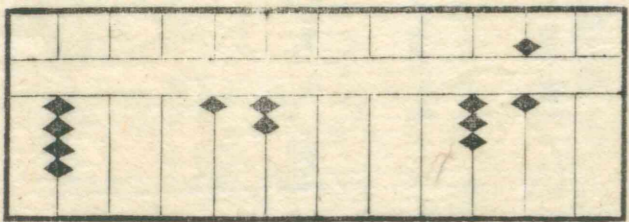
河圖に黒き成數

同圖に黒き成數

此は老陰のうへに成終て、やう河
 圖より下なる。次は老陽と見
 合す。

三變
 標へ除いたる三十
 六策に數

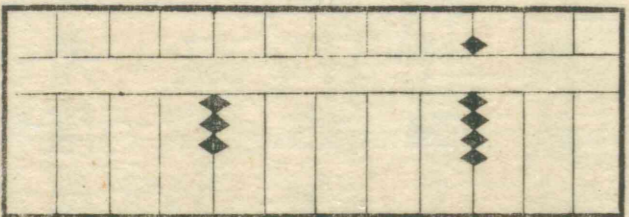
奇拗合せたる
 十三策より、拗の一
 策と除きたる數



此四より右に候

上と割る

上と割る



河圖の白き成數

同圖に白き成數

此は老陽のうへに成終て、かくぞある。
 右は老陰と合て見つづ。諸老陰
 老陽は四除いたる。少陰少陽は四除い
 あり。奇、妙。

右此圖どもと筭とやゆらぐ見くらむむる老と少と
 此差別いやも明うれるべかれ候いに祈りけ居る
 學者之ともげあへ姫昌も八と老陰六と少陰とせ
 る之たりや心得む志の心つきてむ心なき人此北は
 水なり冬ぬると思ひてうちつ々に六と大陰八と少
 陰ふりへたるよこそあれもくやとおのいぬる
 し此は姫昌が志いてまうけゆる偽筭法なりとも老
 陰ハ八ぞう一少陰は六ぞう一やいあよいやよ証
 よ即むあやゆる諸姫昌が筭法をやや見むはあや

一やあざらうらうづければ其世此人^{シタケル}頰ふ^{オチミド}畏惑ひて其
 筭數此うらはぬるまの心づくは神なりむれりけ
 むされどもくこかすつる事にはかぬるげさひ
 る事此あやきバ世をみるやうにゆいよ悪く見ゆる
 ものよ外むされば四十九策此筭法を真勢達富とい
 へる人はあや見て四十八策此新説を多くたり其
 此説し夫著を撰へて得る所此策四と奇と一八と偶
 と然るよ四十九策りては初變よ左手此策を撰へ
 て一を得れば必右此策より三を得て掛二此策を
 三合して五策此奇數と成る或は一を得れば必右
 此策より二を得て掛一の策と三合して五策の奇數
 と成る或は三を得れば必右此策より一を得て掛

一此策と三合して五策此奇數と成る。さて四を得れば必右の策より四を得て掛一の策と三合して始めて九策此偶數と成る。是奇數と成る。この三偶數と成る。この一此は奇偶三増倍此扁倚なり。豈これと公正此立法をいむやといひ。四十八策此用數をば初變ふ左の策と撰へて一を得れば必右の策より二と得て掛一の策と三合して四策此奇數と成る。或は二と得れば必右此策より一を得て掛一の策と三合して四策此奇數と成る。或は三と得れば必右此策より四を得て掛一の策と三合して八策此偶數と成る。或は四を得れば必右此策より三を得て掛一の策と三合して八策此偶數と成る。是奇數と成る。この二偶數と成る。この二なり。此奇偶等分あり。十有八變中ふ隻半此冗策れ。毫髮此支吾なく。真に至正此筮法なり。此此人。四十九策をありと見たるは。學者たち此ある中獨めけて見ゆれど。十有八變此先入

そ此痞疾をばさるはもとよりにて。八は老陰より。六は少陰なり。事をも心づの福候。三變せる一爻此奇劫合せれば必右十三策。十七策。廿一策。廿五策。此數外々ではえあらぬ事。も心用われきて無證ふ。四十九策此九は八此誤字なり。やまへり。さる。此は姫昌がふく。筮法をさる。故ふれむ。諸五行大義。餘手有_二四七_一。故名_レ七也。有_二四八_一。故名_レ八也。云々。餘有_二四九_一。故名_レ九也。有_二四六_一。故名_レ六也。云々。あ。按ふ。六此餘手餘といへるは。蕭吉がさひ。い。て。撰過此

策數のりかゝ搦過此四七と七と一四八と八と一四九と九と一四六或六を以て卦をたつるよりあるも
のり十三十七廿一廿五と十二十六二十廿四を以て
てもよき事と思ひて達富ッ如き新説も出来ぬなり
上にいへる如く筭きて見む所扱此一策を除く移む
十二十六二十廿四此あやまるともよろしく此とあ
まりのり數も九八七六とさうむる必十三十七
廿一廿五とのりあるさるともやとるこれ十三十
七廿一廿五此うらゝる老少此數のり九八七六此おも

了てある事とあるたる人此やうのアーゆるに強ひて
四九と九といひ四八と八といひ四七と七といひ四
六或六といひ來れるのり守村大皇國に生れてい
で神のりのひと思ふ直き正一歩心きて見れば四九
は三十六策のり或九といひおほえび四八は三十二策
のり或八といひおほえび四七は廿八策のり或七とい
おほえび四六は廿四策のり或六といひおほえび
のりの論のりをそ此強言ふ世々此學者たれば志
たがひ來れりとおもつ候おもむきそ此性鈍しやぞ

おまひやうる。さる漢籍と見て、それとあひまど出
る故、皇國もうけ、きりか、庚
申と呼ぶ。申にうけ、猿田彦大神と
祭る夜、いと、説き、ちれ人も見ゆる。ちり、さして
それ性鈍き國、うけ、人もみれ、聖人ぞと、畏て
うけ、奸智深き生れ、姫昌郎れば、四九は三十六、ち
とい、う、九といふべき、四八は三十二、ち、い
で、ハ、い、ぶ、き、四七は廿八、ち、い、う、で、七と
いふ、き、四六ハ廿四、ち、い、う、で、六といふべき、
うれ、深き、たく、これ、ち、九八七六、ち、數、ち、う
に、周數四十有九とし、是と二、う、けて、右手、此、一、半、よ

ア一策とりて、小指、此、間、と、挟む、ち、此、は、奇、此、數、三
變、此、と、合、せて、十三、十七、廿一、廿五、と、ち、む、故、ぞ、う、し、
是、ち、む、強、て、ま、う、け、ち、偽、筮、法、此、奥、所、に、あ、り、け、
ち、ち、と、周、よ、う、ち、い、く、む、く、の、世、を、う、る、來、と、け
れ、ち、ち、人、ち、に、か、ち、れ、ち、ち、ち、ち、神、此、三
う、げ、ち、ち、思、ひ、得、と、ち、れ、今、い、い、あ、ち、ち、ち、
此、要
き、事、ち、ち、ち、考、へ、得、ち、ち、ゆ、ち、ち、と、つ、い、で、一、云、ち、
お、ろ、ち、ち、ち、沙、門、文、雄、が、著、ち、ち、磨、光、韻、鏡、ち、ち、
ち、ち、ち、ち、韻、此、字、を、為、鎮、切、に、ち、ち、外、轉、ち、ち、
第十七、開、此、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
此、補、字、辨、を、か、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
ち、ち、漢、籍、と、見、て、は、い、う、ち、ち、思、ひ、論、ち、ち、

○復古八卦方位辨下卷

○三十二

此を安政四年八月より、大江戸へて、書林と尋ね
人ありて、此の人は、玉篇總目五百四十二字翻切例早
見の草稿を以て、五月、同五年十二月かへて、來て尋
ね、事と神の草稿を以て、たまたま、ぬれを、とおぼれ、歸字
例纂疏に、草稿を思ひ、たまたま、大い、下書り、同
六年三月、つり、飛脚、男、此度、大坂、出、同
と、り、來て、京都、木村勝助、書林、て、求、免、侍、
ぬ、篇、海、代、脱、本、外、ま、ど、五、音、集、韻、は、皆、う、て、切、韻、指
南、圖、も、そ、い、て、侍、と、い、ふ、草、稿、を、か、き、を、へ、て、補、字
辨、を、こ、そ、や、い、そ、ぎ、て、纂、疏、に、草、稿、を、か、き、を、へ、て、補、字
給、ふ、小、幡、に、殿、と、つ、つ、へ、ま、い、る、重、子、御、方、に、此、れ、
呼、び、て、志、を、ら、く、机、に、ま、や、を、ら、れ、れ、を、け、つ、へ、て、よ、と
の、こ、ま、へ、り、が、そ、れ、六、月、廿、一、日、小、幡、に、城、と、免、れ、
て、い、れ、と、ご、さ、く、つ、う、ら、身、と、ぞ、れ、う、又、け、る、か、え、れ

予ゆとも神にみそつらひなりべし。されば、志の、おも
ひ、た、ら、る、補、字、辨、ぬ、れ、ど、筆、を、お、こ、し、れ、ば、そ、れ、心
と、れ、て、つ、つ、ら、捨、て、た、り、其、心、を、あ、り、れ、と、お、ぼ、
ゆ、れ、は、と、と、み、た、し、い、け、む、小、幡、に、道、に、ゆ、き、か、よ、ひ、に、草
木、の、葉、の、ハ、大、空、の、り、れ、と、ま、り、に、眼、を、わ、か、す、東
よ、く、ふ、く、風、と、西、よ、く、ふ、く、風、と、は、い、さ、を、別、れ、る、事、の
と、と、さ、や、れ、た、れ、は、方、位、を、り、事、に、心、づ、き、
ハ、卦、に、正、方、位、を、考、へ、正、著、法、又、も、思、ひ、いた、り、ぬ、ら、
へ、は、周、易、に、筮、法、を、も、と、け、く、ま、ら、る、姪、昌、が、羨、里
と、囚、れ、居、つ、逆、意、あ、り、て、考、へ、ま、け、る、奸、智、に、深
さ、も、こ、つ、り、が、多、く、れ、は、我、は、君、つ、つ、あ、る、道、乃、ゆ、
さ、み、い、つ、で、と、思、ひ、め、を、ら、て、う、れ、文、小、婦、奇、於、劫、と
あ、れ、む、奇、劫、合、せ、る、數、に、中、に、必、然、お、り、て、あ、る、べ
し、や、心、一、つ、と、ち、ぐ、と、と、だ、き、つ、周、又、媚、び、る、に、孔
丘、す、思、ひ、得、ざ、り、け、む、と、お、ぼ、ゆ、九、八、七、六、れ、か、く
れ、ら、と、尋、ね、得、た、り、け、む、是、も、神、に、さ、け、け、さ、や、た、か、
る、れ、ら、べ、し、と、思、へ、は、あ、ら、う、多、く、さ、み、泪、お、り、る、か、ら

十三策を左手よりとりて、此中より右手より五策
 とりて、二が考へ得たる正著法に如く、左手に指の間
 に挟み、残り七と生數に四より、揲へ除ひ見よ、四策奇る
 り、その揲を歸せれば、則九策とあり、うらに十三策
 の老陽や、いふべきあり、是老陽といふ九に、かくれ
 るあり、又十七策を左手よりとりて、六の中よ
 り五策とりて、法に如くして、残り二と生數に三より、揲
 へ除ひ見よ、三策奇るあり、その揲を歸せれば、則八策
 とれるなり、されば十七策の老陰なり、
既よいはる如
少陰より非は

八に、かくれざるあり、又廿一策を左手よりとり、
 ちて、此中より五策とりて、指の間を挟み、残り二と生數
 に二より、揲へ除へば、奇なり、二策あり、その揲を歸せれば、七
 策あり、廿一策は少陽なり、七數に隱處カケにあり、又
 廿五策を左手よりとり、ちて、此中より五策とりて、
 法に如くして、残り二と生數に一より、揲へ除へば、奇なり、
 一策あり、その揲を歸せれば、六策あり、廿五策は少陰なり、
是と大陰とせらば、兼
ていへる如く誤りあり
 六數に隱處カケにあり、かく姫
 昌は奸智とあり、ひて深く、九八七六の、かくれざるか

すへおきて、此筮とては河圖ふ合せて、いづれ
といひ、又筮とては河圖ふ合せて、いづれとい
ひけむ、そ此あひあふ事なりや、幾やむにむしあれ
は、其頃比漢人たち畏惑ひて、たゞ聖人、くも屈敬拜
伏せりけむ事、うべなりとぞ思ひやらむ、まて姫
昌が奸計なりて、そ此子發殷をほろりて王位よれ
ば、且父比跡をふみて、聖人比ま跡をけりけるが幸
ひ、周世いく百と、いふまゝのまゝあづきりけ
れば、本居翁が孔子ハよ多人と、いふへる、仲尼さへ媚

びぬきて、聖といつる、いづれ、其言行と、是聖行なり、是
聖語なりと、誰もいふ事とぞなり、そてにける、さ
れど江家次第、先聖先師古者、以周公爲先聖、孔子爲
先師、唐太宗貞觀二年、詔停周公爲先聖、始立孔子廟堂、
以仲尼爲先聖とあり、此は貞觀政要崇儒學、詔停周
公爲先聖、始立孔子廟堂、於國學、
誓式舊典、以仲尼爲先聖、顏子爲先師、
を見とあり、これより此は太宗より
づさて、周公を偽聖と見る、高き眼ハ好りければ、お
此川うらふ神比志のせさささるる、いづれ、同書慎
所好、
朕今所好者、惟在堯舜之道、周孔之教、以爲如鳥、有翼、如
魚、依水、失之必死、不可暫無耳とあり、されば太宗が周公と

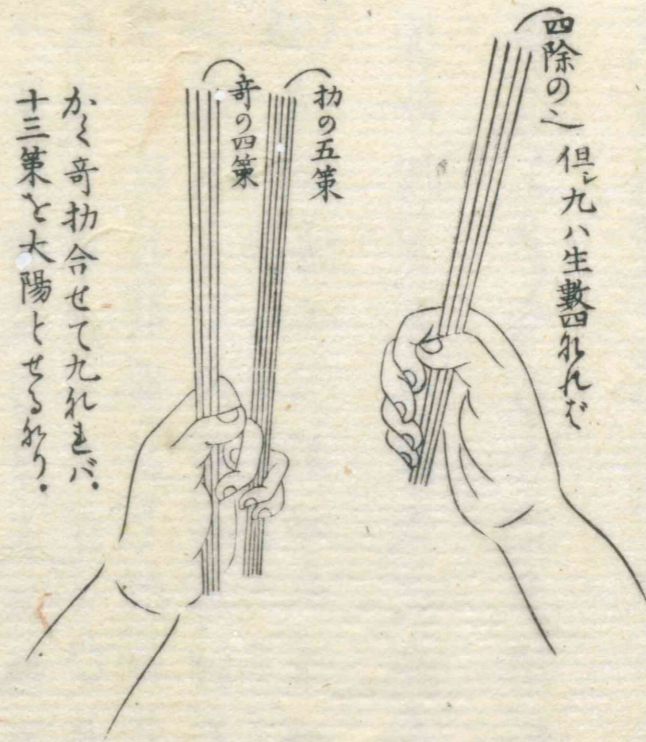
偽聖と名はさる。六此周公が父なる文王が、逆意あ
事つちおはす。偽方位偽筮法邪れば、先聖を停免さ
る如く、改免かゝる人も、ぐれいうでくゝとぞ思ふ。さ
らば、何らぬ筮占ふ欺れむ人も、少く方位を犯してま
がふ阿もむ人も、かれゆるべし。うらふと周易に溺
れ居る人は、いひにささるべし。判に名高き人少く、和漢占
をわすれぬ筮法此正偽し。周易よ心を深むり。思ひ
やろ、れど、考ふる。周易よ心を深むり。思ひ
は、文王周公は、そをよきとせし。周易よ心を深むり。思ひ
先哲此靈魂、うけられ、守りて、正應はあり。れど、
又八卦此正方位と心得。正著法よて力を尽きて占

判をむく。太昊氏と始免奉て、天地雷風水火山澤
此八神は、云ふまじ。ある時、は、正應あり。守
りた。疑ひあり。下にある。占とは、おや、免
るれど、信しとぞ思ふ。心ありむ人は、凶神たをけ
と。吉神たをけとの。差。儲周易おこれり。いとを
別とよく思ふべし。九八七六のおと、
とけいたるる人。ささる。あざりけれ。な
ほよくそれ。あざり見せやとて、左
圖と。

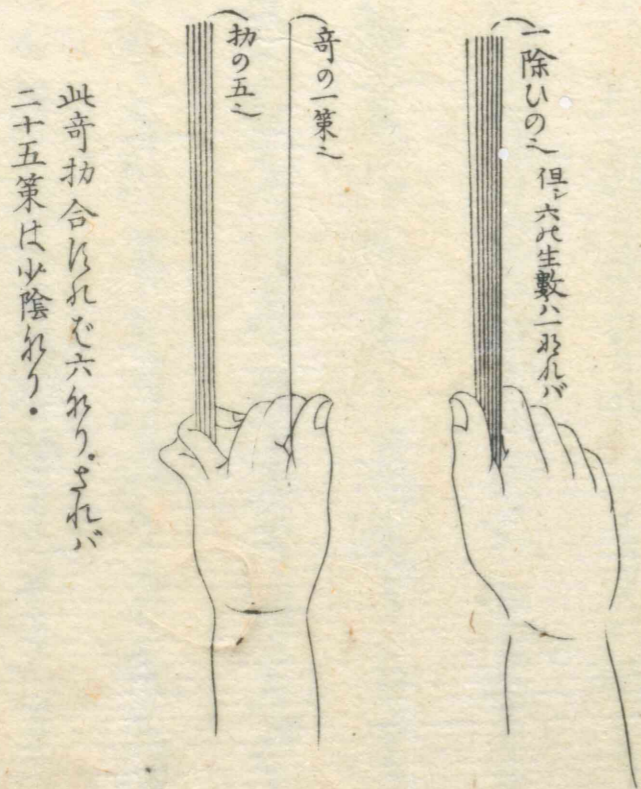
周易八數者在七十策之圖



周易九數者在三十策之圖

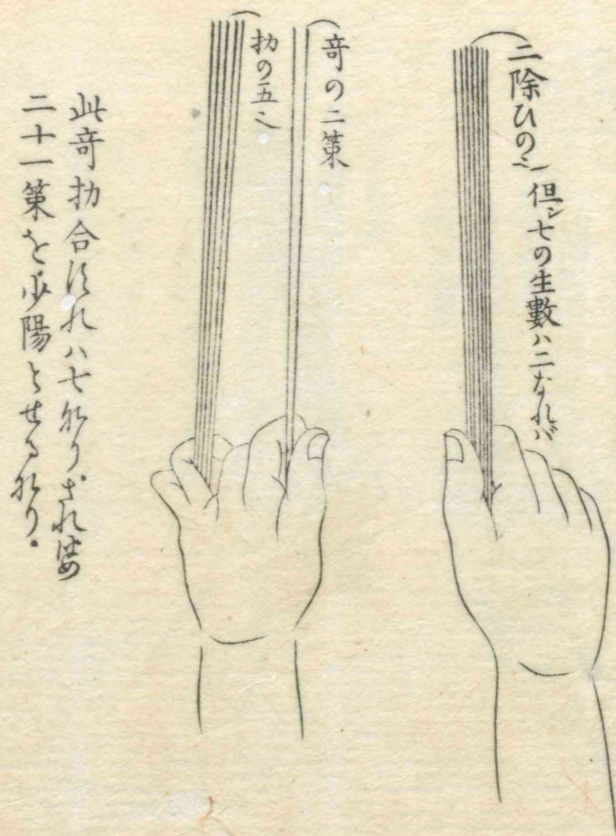


周易六數者在於五策之圖



此奇初合はれむ六なり。されば
二十五策は少陰なり。

周易七數者在於一策之圖



此奇初合はれハ七なり。されば
二十一策を少陽とせしむ。

右の圖どもを見て、あれをこぼりしれども、や、きり
ふ人もけり、海、よくきいてよ、きけり、や、きり、
と思ひぬ、きり、世、海、あ、きり、
きり、
と、思ひぬ、きり、
は、こ、そ、よ、の、り、え、さ、り、海、それ、ふ、よ、り、て、安、く、さ、や、り、那
む、物、ぞ、や、思、へ、海、こ、ま、り、て、心、と、深、え、力、と、つ、く、り、て、姫
昌、が、た、く、こ、か、く、せ、る、か、れ、隠、處、ぬ、れ、バ、よ、く、知、せ、ぬ、
し、て、き、り、
こ、り、と、き、り、事、れ、あ、き、り、り、れ、ま、バ、此、圖、れ、び、り、り、り、

いみどり、きり、
たり、といふ、説、れ、非、れ、る、事、と、も、ま、ま、
ま、り、ゆ、り、
考、へ、得、る、
八、卦、此、方、位、を、り、り、
六、の、神、た、ち、
圖、を、い、ひ、
と、見、此、二、圖、れ、真、中、れ、る、五、圈、と、真、玉、と、見、て、
卦、れ、正、方、位、と、考、へ、
か、り、の、正、著、法、と、思、ひ、得、る、

けれハ、先天後天此方位を偽れりといひ、大衍の數五
十と片羽れりやいひやふれるうらに、そ此さ偏ふ
よきて、先哲をちと鈍とも、驚才とも、をりくといひお
や、免くろ、され海守村をふくむ人もあをねむ、さる
人はこれ二圖をりきうけき玉とも、奇ハ一き玉とも
ちるび、たゞいふ所らよ、偽方位偽筮法、欺れり、目も
心もろくみ居る、これ人ねまびいづはきむ、さて又
文王よりちれり、世はいくぢくの變りて、易學者たち
此數は、粟三石此、をりふを、のりもあをぬべれど、獨

もねまひ得ざる事と、かくいふれまば、やう見む人は
心と平うふして、正言う僻言を、よく考へ見て、強ひら
らばゆる以事れく、やとくく、うちやふりてよ、正一と
むむむ事れく、やとくく、我み志々ぐひてよ、うめ
くら蛇此物、^{オチ}懼ぬ、これみ、あれバ、^{ホホ}鹽沫のや、ま
うぎり、ちとちらむ學者たちよ、^{オチ}墜事れく見せて、
うちたぐれぬや、か、川の身はちとれづら、あやさ見
る雲此上まぐ、まきと迄あぐまけ、と思ふこれ考へ
どもにねむ、ちのねりいほころもの、平田翁が書

籍目録を見るふ。早く心づつれたるさるゆかり。これ翁
は既よいつる如く。學者たちれさうひやをさうつに六
迄て見ゆれば。いのげつて。免傳と義説のむと。お
もひやうも。故ふ。三易由来記。太昊古易傳。と見
まげると。鉄胤先生よきこと。迄きせて。さて其書どのの
來む間也。まち遠れるべなれば。いざや心れぐさよ。我
思いと。りうるおもひ。幾とと。筆とりそめも。ハ。萬延
と。何々々々々。御世の。閏三月の五日。かきと。ぬ
るは。それ年也。九月也。三日。

新居守村

天地乃神也。氣をみよ。四方のさる。

ようみれさまる。けと。れり。

天地の。正し。幾道と。み見れは。

たれ。は。ハ。方也。かる。た。づ。へ。せむ。

うく我思ひよれ事乃草稿はかきとめぬれども此
書籍と平田氏よりおらせざりけむバ、おらるるみよ
乃せる復古八卦方位圖此一むを、おらるる四日消息
してまぬらせり。そ此十月廿二日、書籍とおのほ
き包物来り、これ、おらやまるもいそぐれて、おら
き見るよ三易由来記あり、やぐて見きてゆくと、盗免
アと人やとぐ免む此、おら、き説もあむ。此はこれ翁
よりきてあ
れ、おら、おら、似て似ぬもあむ、大きよ、たぐふもあ
る、うらふ、正方位又正著法とは、考へ定めらるるこが心

形、うらふ、千引石、おら、おら、いさ、うら、うら、きぬ、儲又あ
くる年、九月十日、太畧古易傳と、きぬ、うら、見るよ
い、や、め、傳、と、此は漢才もい、と、深き故、おら、と、
れ、おら、皆、よ、ら、と、ら、あ、ら、て、此論、免、おら、む、先、何、を、ら
いとむ、易、此、説、あ、ら、と、ら、ら、中、に、高、く、と、め、け、て、見、ゆ
る、お、此、二、書、に、お、ら、む、あ、ら、け、ら、志、の、ぬ、け、ら、説、お、方位
を、ら、ら、免、ら、て、た、ぐ、ふ、事、此、ら、ら、考、へ、お、ら、ら、ま、ら、て
新、お、説、を、出、ら、は、大、事、お、ら、む、う、ち、つ、け、よ、い、う、で、ら
や、ら、ら、ら、て、書、櫃、お、奥、ら、ら、か、と、ら、お、ら、た、れ、ど、年

よそむきたる方位なり。さるうらふ天地定位。山澤通
氣の二繩も天かくれむ心と平りけり。我れ合
を見て思へるは論まほしき事の終きありあはれ
ど此翁れらげよよりて思ひ得たる事もおほれ
かくりふだよ汗あゆる
あつちりて荷ひ出つ
とふふとて道をおもぬこさるはまが心よあ
ぬぞと翁がれを塊れあまうけりてまらひやせむと
おほゆれば又さるにとうで、あらし見つてやと思
ふに漢文のついで、あてよのらむ。それあつて
おほはるる翁。繫辭説卦其外よもなかりてめ付た
きとやりて我思ふまゝにやる筆れつのみトかき

る。これ論ひもれきてようをさるらあと思ひお
こせらば去年に五月朔日なり。その十七日よかき
とへぬればやうて易故新を題をおはせて。近き
まのらふもさるらり。遠き友もきこせたり。それど
今よ答免おらせあるは獨もれ。此はならひ見ぬ文
章よ。きひてそのせうらみきこせごうかひかい
まだければ味ひ考ふるませもれ。とり捨たる
に。實よ山田に曾富騰れ見らるげもれ。我身よは
あれど天地にあらるはりやよりまて。大うらは

こ此事をも考へ合せて此此復古八卦方位辨又れ
ひあれが心あはむ人も多し此見たるむをよしと
りしと論とではうれはざるべしいでやかききよ
免てふく風此あてしあははたの多しもみドのきよ
も見せむやや文久三年三月廿日又うごうぬ筆と志
ひてとりそ免ていやまのむまく机ふむひつ
六月廿三日よ那む。

漢倭人カラヤニト多オホうれどいまコト知ルれ。

志シのあれはコト正言コトもコト僻言コトと見む。

古コへコりコへコせコ今イマよりは。

まマさサ一ヒト道ミチとトもモれレもモこコらラまマ

大北辨は暉の信事書の辨き。一もらう。ま。一。せ。あり。部。名。を
 ち。一。く。招。卷。と。さ。入。せ。む。さ。わ。ハ。い。み。じ。う。は。わ。う。う。見。延。ぬ。へ。え。え。れ。た。
 軍。の。の。一。て。さ。と。と。お。ひ。を。る。の。ら。さ。て。は。い。る。く。い。ま。の。り。う。人。の。
 お。の。づ。ら。か。き。ひ。が。め。め。て。や。く。事。も。り。で。く。え。れ。を。妙。ま。大。德。の。作。り。の。
 う。せ。の。ほ。ど。よ。本。よ。あ。ら。せ。ま。け。し。と。い。ん。あ。る。た。の。お。ひ。ひ。出。ら。れ。其。は。
 我。子。守。雄。金。沢。麩。高。橋。董。芋。か。あ。り。け。れ。を。才。那。新。井。為。業。新。左。衛。政。又。
 里。人。の。あ。ら。ち。ら。ら。む。も。ら。ひ。え。く。く。か。く。て。う。ど。い。つ。事。と。か。う。う。や。ハ
 くれ。さ。り。を。む。う。や。れ。され。ど。な。は。お。ひ。よ。り。此。あ。れ。を。ぞ。れ。板。は
 二。が。文。庫。よ。う。め。う。み。ぶ。う。は。や。り。ち。ら。ん。ま。い。く。な。む。
 慶。應。元。年。と。い。や。の。土。月。の。中。き。う。て

慶應元年といやの土月の中きうて



白屋著述書目

森木芽 草稿成
五篇總目 五百四十字 翻切例早見 草稿成

万葉集句早見 同
 歸字例纂疏 同

活語曉歌五十首 同
 磨光韻鏡補字辨 未稿成

易故新 刻成
 復古葬祭事辨 草稿成

復古卦方位辨 同

群馬県立図書館



0295989-8



群馬県立
図書館